学ぶことは人生最大の苦痛。
だからこそ楽しい授業を提供したい

2014年度春学期ティーチングアワード受賞
対象科目：経済性分析

2015年3月で定年を迎えた藤田教授は、長い教員生活においても常に「教える技術」を磨き続けることに努めてきたという。長年にわたり同じ授業を続けながらも向上心を失わない、そのモチベーションはどこから来るのであろうか。

藤田精一
商学学術院教授

「授業をおもしろく」という姿勢を常に持ち続けてきた

アメリカ生活も含めて、大学教員として40年以上のキャリアを持つ藤田教授。今回の受賞に際し、授業に対して抱いてきた思いを「常に、授業をおもしろくしてやろうという気持ちを持っていた」と振り返る。

「自分が話していてつまらなければ、聞いている方もつまらないでしょうから、自分が少しでも楽しめるようになったらいいなという気持ちはいつもありましたね」。

この「経済性分析」という科目は、企業の中で損得の判断をするときに、その意思決定に役立つ情報を提供する学問だ。「授業をおもしろくする」とは言っても、数値を扱う計量的な学問をおもしろく教えるというのは難しい。まさに計量的学問の典型のようなこの科目では、どうしても堅苦しい説明に終始しがちになる。

そこで、藤田教授が心がけているのは、「あまりにロジカルに攻め込まないこと」なのだという。「たとえば、あなたはこんな経験をしたことはありませんか?」などと、身近な事例を随所に持ち出して、学生に問いかける。論理的な話を、できるだけ学生がイメージしやすい具体的な話に落とし込んで説明するのだ。ウィットに富んだジョークも交えつつ、にこやかな笑顔で語りかける藤田教授の穏やかな口調も、教室のムードを柔らかくしているに違いない。

学術のトレーニングとして事前準備は怠らない

話の途中に盛り込む様々なたとえ話も含めて、授業の事前準備には力を入れてきた。

「教員も、本来は予習を1回やるべきだと私は考えています。昔、アメリカで教え始めた頃は、毎晩大学に行ってはその場で一度リハーサルをしたりしたものです。話の内容ではなく、伝える技術をトレーニングするためです」。

当時事前に用意した英語のジョークを集めたファイルは、今でも手元に残っているという。　話をおもしろくするためには、「山をいくつか作る」こともポイントだという。そのためにはどんな山を作ったらよいかも、あらかじめ想定しておく。

実際には、目の前の学生の反応を見つつ、集中力が欠けてきそうなタイミングで冗談を盛り込んだりもする。「後から学生に、先生のあのダジャレはおもしろかったなどと言われるとうれしいですよ」と顔をほころばせる。

そもそも大学教育においても、カスタマー・サティスファクションの視点を持つべきであるというのが、藤田教授の持論だ。

「カスタマーの立場にある学生に対して、できる限りのものを提供するのは教員にとって当然のことでしょう」。

そんな思いは確実に学生にも伝わっているようで、授業アンケートでも履修生のほとんどが「授業をよく理解できた」「有意義であった」と回答を寄せるなど、大変満足度の高い結果となっている。

KAIZENの思想で授業も向上させていく

そんな、たゆまぬ努力の背景にあるのは、自身の研究テーマでもある「KAIZEN」の思想だ。大きく変えるのは難しくても、よりよく改めるための小さな試みを積み重ねていくという考え方だ。「一度に大きく進歩できればそれに越したことはありませんが、限られた時間や能力ではなかなかそうもいきません。それでも、やってみようと思える小さなことを続けていくだけでも、得られるものは大きいのです」。

授業もまさにKAIZEN。長年同じ授業を続ける中でも、イラストを加える、図で説明する、説明のバリエーションを変えるなど細かな工夫を加え、常に「伝える術」を進化させ続けてきた。

「授業をおもしろくしたい」という思いの根本には、「学生に教えることが好き」という一貫して変わらぬ教育者としての情熱がある。

「『学ぶことは人生最大の喜びである』という言葉がありますが、これは学び終えた人間が言うことであって、実際には学ぶことは人生最大の苦痛です。その苦痛を減らす授業をいかに工夫してKAIZENするかは、私に与えられた使命だと思っています」。

学問は苦しいものだからこそ、授業を少しでも楽しくして興味をもってもらいたいという思いにつながっているのだ。

「私の授業を受けた学生には、難しい学問の中に、ふっと分かったような学問があったなと感じてもらえるとうれしいです。損得の概念は企業でも必ず必要になってくるものなので、そのときに思い出してもらえれば最高ですね」。

今後も教える機会がある限り、さらにKAIZENは続く。

「そもそもKAIZENとは問題解決学です。問題解決とは今ある姿とあるべき姿とのギャップを埋めること。あるべき姿はときと共にだんだん変わっていくものですから、そのギャップは常に存在し続けるわけです。つまり、KAIZENに終わりはないのです」。